工54 89
259-154

帝國圖書館藏

教育と關係

文學博士 谷本富著

東京
合資會社 六盟館藏版

明治
39 9 17
内交

通志堂

人村雲日榮

京都中學校創設主意

今や京都は關西教育の一大中心にして、復た昔日の京都に非ず、上に帝國大學あり、高等學校あり其他各種の專門學校亦甍を連ねて相對す、隨て這等高等の學校に入らんと欲するもの、夙に鄉關を出て〻笈を負ひ、來り集まる年一年より多し、設ひ一二公立の中學ありと雖も、都下の子弟すら尙全く之を容る〻能はず、焉ぞ盡く彼等の需に應ずるを得んや、況や中學の敎育は、啻に高等敎育の階段たるのみならず、社會の實務に當らんと欲するものも、亦必須缺くべからず、其普及は邦家方今の急務に屬するおや、是に於て吾人敢て自ら揣らず、地を京都市東北一帶の高地、吉田の勝槩に卜し、本年四月を期し自ら命じて京都中學校と曰ふ、此地山河襟帶、四圍開豁、最も學生智德の涵養に適す、則ち吾人同志の期待せる學風の樹立は實に此地に存す、加之校舍の新築、設備の完全に論なく、職員の適良にして敎授管理の摯實周到なる、直に吾人の理想を發揮し敢て世の凡々たるものに視へて大に其面目を異にするあらんと欲す、加ふるに帝國大學、高等學校、其他高等の諸學校に隣接し、自ら學生の思想を高潔偉大にし、以て風紀の弛廢を防遏するに足る、若し夫れ此京都中學校

の經營にして粗ぼ其緒に就くを得ば、更に文學專門の學校を開設し、文學・哲學・史學を該ね、殊に宗教學に渉り、皆愼重公正の研究に從ふを得せしめ、聊か以て這種專門教育の欽欲を補ふ所あらんと欲す、其豫科を置きて連絡を持し、或は別科を設けて一時の機宜に應ずるが如き一切の施設自ら成竹あり、事固より他日に屬す、今日具に之を述ぶるの要なきなり。

終に一言すべきものあり、此京都中學校の經營は、佛教教育財團主として其經濟の責に任ず、顧ふに佛教宗派に在りては既に各自の教育機關あり、吾人超然其外に獨立し苟も邦家社會に對して中等教育の普及に資し、專門教育の欽欲を補ひ、以て世道人心を扶植する所あらば、卽ち是れ其財團の目的に副ふ所以と、吾人深く信じて疑はざる所なり。

明治三十九年八月

◉私立京都中學校氏名

校長	大橋十右衛門	主事	大野四四次郎
教頭	文學士 曾我部俊雄	教務主任	元田修三
名譽講師	法學士 市村光惠（京都大學教授）	仝	上山內晉鄉（第三高等學校教授 文學士）
仝	文學士 小林照朗（佛教大學教授）	仝	法學士 小津茂右工門
講師	法學士 富山單治	仝	理學士 岡田定治郎
仝	元陸軍教授 大野四四次郎	仝	元海軍教授 笠原方正
仝	文學士 法學士 高原操	仝	文學士 曾我部俊雄
仝	內田喜孝	仝	元田修三
仝	吉田茂吉	仝	平瀨作五郎

外數名（講師イロハ順）

補缺生徒募集廣告

一 第一學年、第二學年、第三學年ヲ通ジテ若干名
一 願書受付來九月一日マデ
一 入學試驗九月二日ヨリ
一 規則書入用ノ者ハ郵劵二錢ヲ要ス

京都上京區岡崎町三十四番地
文部大臣認可 私立 京都中學校

中學校入學受驗者募集

第一、二、三學年ヘ受驗準備教授

京都岡崎町三十四番地
京都豫修學層

序

宗教と教育との關係、これ最も古き問題なり、然も未だ新しき解釋を得ず、哲學者これが解釋を試みるもの少からざれども能はず、教育家、宗教家、おの〳〵自家の立脚地よりこの問題に焦慮すと雖、あるは我見に墮し、あるは偏執に失し、眞に中正醇粹の議論を見出すこと能はず、蓋しこの問題たる甚だ困難なるに因るなるべし、問題の困難は、益々これが解決の緊切なるを感ぜずばあらず、京都中學校の設立者、爰に見る所あり、新教育主義の呼號者たる文學博士谷本富君に懇請し、この問題につき講演を願ひたり、其原文口語の筆記を更に同博士に乞ひて訂正を仰ぎ、その意見を社會に紹介せんが爲に、公然出版するに至れりと云ふ、蓋し京都中學校の設立及び其理想は、予が甚だ賛同する所にして、宗

教と教育との聯絡は智德並進の實行を奏するに利ありと信ず
此書一たび世に出づ、必ずや宗教と教育との關係に、新しき解釋
を與へ、その世教に益ある疑ふべからざらん、聊か愚衷を抒べて
序文に代ふ、

前法華宗管長　大僧正　古谷日新

宗教と教育との關係

目次

一　緒論……一
一　宗教と教育と提携の必要……七
(1)我國古來の歴史……七
(2)西洋古今の沿革……二八
一　宗教と教育と分離の理由……三三
一　宗教の本性……四三
一　宗教の由來……五二
一　宗教の効力……六三
一　結論……六九

宗教と教育との關係

文學博士　谷本富講演

諸君の本日は私立京都中學校の御發起でこの市會議事堂に於きまして大講演會を開催致さるゝに就き、不肖富に懇篤なる招待を下さりまして其講師の任に當る事を囑託に及ばれましたは、私の名譽と存ずる所で厶ります、又來會諸君の中にはまだ御見へにはなりませんが、瑞龍寺尼公を首めとして、諸宗の管長、高僧諸君、又公私立各學校の校長、教員諸君、其他府市の官公吏、名譽職員、見渡す所官民僧侶、所謂善男善女(失笑)無慮一千餘名の諸君が玆に御集りになつて私

の卑見の爲に靜聽の榮を與へらるゝと云ふことは、私の如何にも感謝に堪へぬ所でございます。所で今日の話は例時のことは違ひまして問題が問題でございますから無論滑稽などを混ぜて面白く御話をするのではありません、豫め夫れは御斷りをして置ます。又只今岡田理學士から御挨拶のあつた事でありますが、之れはどうぞ豫め深く御考になる事を希望するのでございます、と云ふのは、どうも宗旨の話は人の感情に障り易いもので、一宗の方を少しく善く云ふと他宗の方では怪しからぬと云ふ、一派の方を少し貶すと他の派は手を叩いて喜ぶと云ふ風が見へる。さなきだに今日一体日本の道德は非常に頽廢をして居る、假令ば人が演壇に立つて演說をするとか、若くは筆を執つて議論をすると、

正々堂々と正面より攻擊を加へない、僅かに言葉の端などを攫まへて、而も匿名或は變名を用ひてからに攻擊を加えて揚々得たりとする斯くの如きことは實は士風振起の世の中に在るべき事では無い、而も今日は滔々として俗をなしつゝある、斯樣な有樣では到底言論の發達と云ふ事は望むべからざることである、宜しく斯樣なことはせず、議論があるならば正々堂々と正面から向つて來るが宜しい、僅かの言葉尻や筆の端を攫まへて彼是と非難を加へて攻擊をするなどは甚だ男子らしくない、斯う云ふ事は演說をする自分が嘆ずるのでは無い、今日の社會の道德の風潮の頽廢をして居る事を嘆ずるのである、私は決して喜んで今日諸君の前に立つて多辯を弄する積りはありません、私は大學職

員の末席に列し、相當の專門の學術を持つて居るから、夫れを研究して、學生にも傳へて、而してこの學術の爲に勉めて居れば夫れで足りるのである、然るに今日此處へ出たのは世間には名望あり博識なる諸君が澤山あるにも拘はらず、私を引出すに就いて會主が如何に心を碎かれたであらうか、如何にお足を運ばれたであらうか、一個人としては實に會主に對しお氣の毒の事である、けれども私は實は如何にも現時の聽衆、……諸君とは言はぬが、現今一般の聽衆の風儀が面白く無い事を深く感じてゐる、故に公會の演壇には決して自ら進んで演說をしやうと云ふことは致さないのであります、ありますが強いての御希望に依り餘儀なく出たのである、餘儀なく出て、自分の貴重の時間を色々都合

し、且つ過日來病氣の所を推して昨日は京都府、京都市兩教育會の催しに係る教育學講義會に臨み、今日も亦引續き押して出席をしたことでありますのだから、若し評すべき事、不滿足の事があるならば、一言一句の端を攫まへて彼是論議されぬで、正々堂々と正面より御批評を請ひたい、決して御遠慮には及ばぬ、之れは豫め、今日の聽衆諸君には夫れは無からうが、今日の日本の聽衆一般の風儀が善くないから、言つて置き升、例へば新聞雜誌など少し氣を着けて見ると直ぐ分るが、六號活字か何かで以て二行とか三行とかチヨツと挾んで厭味を並べて居る(笑)、之れは敢て恐るゝのでは無いが、さう云ふ卑劣なことは聽衆諸君の面目上止めて貰ひたい、私は決して一宗一派に偏するものでは無い、甲に加

担して乙を貶すものでは無い、是と信ずるものは之れを擧げ、非と信ずるものは排斥するのであります。是れより本題に移りますが、この間茲に二分間許り默つて居ります、諸君の中に若し御異論があるならば……私の演說を妨害せんとする如き卑劣漢は諸君中には居りますまいが、萬々一ござりますならば今の間に御退去あらん(聲を限り揚げて)ことを請求致します。若し默つて居らるゝならばさう云ふ人は無い、又新聞で刺弄るやうな卑劣な人は居ないと云ふ事を取りも直さず諸君の奧判を取つて居るやうなものだ、どうでございます、さう云ふ御異論のある人、妨害せんとする人は居りませんか(博士は少時無言で滿場を見廻す、笑聲起る)……居られんやうでありますから、然らば御異論は無い

と認め、卑劣漢は一人も居無いと認めて、本題に取係ります。」

偖て此講演會御發起に就いては先刻山內文學士より種々御述べになつた如く、之れは來る四月より開校致されまする私立京都中學の創立者の御發起に係つたのでありまして、殊に創立者の藤平日學師の如きは殆ど創立者中の創立者とも云ふべき方で御盡力の尤も多いことであります、同師は御承知の通り日蓮宗の高僧で、寺町通り石藥師下る法華宗の本山本禪寺の住職で入らせられまする、所で斯く藤平僧正などが深く關係せらるる所より、同學士は世間からは此學校は宗敎臭味の學校で、定めて佛敎信徒を拵へるであらうと思はれるであらうが、決してさうでは無いと云ふ御披露でございました、將た又私が毎々藤平師に就いてお話を承はるに矢張左樣であつて、決して是れは佛敎

の機關になるのでは無くて、矢張文部省令に依つて尋常一般の中學課程を施すので、山内學士の云はれた如く宗教の爲に教育を施すのでは無くして、教育の爲に教育を施すものであると云ふことを言はるゝのでムります、所が藤平師は如何にもさう云ふ御志であらうと思ひますが、併し乍らドウでせうか、さうその宗教家の關係した學校だと云ふことを、遠慮する必要がありませうか、先程も山内學士のお話では第三者の判斷に任す、第三者の觀察に任すと云ふお話でありましたが、吾々第三者になつて觀察をして見ませうならば、さうこの學校を佛教の學校とした所で別に不賛成を唱へる事はなからうかと思ひ升、佛教徒諸君は頻に佛教の爲であると思はれるのをお嫌ひの樣だが、私は強て嫌ふべきものでは無いと思ふ、若し之れが佛教の爲にする學校であるとした所で、善い教を施して呉れたならば、私は賛成をしやうと思ふのであります、何となれば今日の教育には是非共宗教と云ふものが入らなければならぬと云ふことを私は感ずるのであるからです。

此事に就いては私の格別の友人、友人中の最も親しき友人なる故文學博士大西祝君が嘗て宗教と教育との關係に就て述べられた事がありまして、同君は同志社最初の出身者で帝國大學文科大學に於て尤も優秀なる卒業生であつた、殊に同君は宗教と教育との關係に就いては何處までも熱心の方であつて私は寧ろ先輩として兄として之れに事へて居つたのでありますが、同君の言はれた事の中には諸君と共に考慮すべきことがあると思ふ、同君が云ふのに、維新以來官民共にこの教育界より宗教を排斥

する爲に非常に盡力をして、今日では殆ど成功をしたと云づて先づ喜んで居ることであるが、自分の考ふる所では是は悪いと思ふ、教育と云ふやうな事は全然宗教的臭味を脱して夫れで果して完全なる教育と云ふものが出來るであらうかどうか、自分は宗教臭味を帶びざる所の教育は完備せる教育と云ふ事を得ざるものと斷言するに憚からないのである、と云はれた事があります、自分はこの言葉に深く感じまして、實は昨年の暮岡山縣からお招きを受けて、先づ最初岡山市の東中山下の耶蘇教の會堂で「亡友大西博士の宗教思想」と云ふ題で講話をしました、其の時も私は耶蘇教が宜いとか佛教が宜いとか云ふ事は申しません、單に教育と云ふ者は宗教と云ふものを全然除外して仕舞つて而して夫れで立派な完備せる所の教育と云へるかドウか

と云へば、云へないと斷言して憚からぬと云ひました、兎に角博士の其言葉に深く感動したので、隨つて昨年來京都府、市兩教育會の聯合で催されたる小學校教員を主としての初等教育の教育學講義に於きましても、頻に小學校には是非宗教教育を入れなければならぬ、小學校には宗教々育が矢張必要であると云ふことを誰憚らず公然唱導して居るのでムります、今日は佛教者の創立に係る私立京都中學校の講演であるから、殊更に『宗教と教育との關係』と云ふ演題を掲げると云ふソンな野卑な考へは毛頭無い。言葉をモウ少し明かに申せば、實はこの學校を創めらるゝに方りまして、丁度昨年の夏でございましたか、同僚の村岡博士の紹介でこの藤平僧正其他の人々が御來訪相成り、今度私立京都中學校なるものを建てるから何卒一臂の力を貸して吳れ

と云ふ事のお求めがあつたのでございます、併し私は聊か思ふ所がございまして、それに就いては今日まで何等の意見も述べず全然無關係でございました、今日この壇に登るに就いても亦決して京都中學校の爲に吹聽演說をし、廣告演說をするのではありません、私は唯之れは一番好時機であると信ずるからで、教育界の諸君には過日既に講演をしたが、モー少し廣い範圍の聽衆諸君に微意のある所を申し上げるのは之れは好い機會である、此好い機會を捨つるに忍びぬから出たのであります、隨つて今日の講演は實は京都中學校創立者には何等の關係は無いのであります、私は創立者に賴まれて廣告演說は致しません(拍手)。諸君、然らば何故に私が教育界に宗教が入用であると申しまするかと云ふと、第一に之れは歴史の上より說く事が出來るだらうと思ふ、日本は申すに及ばず、西洋各國の古來の歴史を調べて見ると、この教育と云ふ事に宗教家が盡力をして居らぬ事はありません、言ひ替へますれば昔は宗教家と教育家と云ふものは殆ど同一体であつたかのやうに見えます、くど〳〵しく申すのも如何でございますか知れませんが、その事實を明かにする爲に少しく例を取つてお話しを致しませう、御承知の通り日本では、先づ王朝時代には已に此京都には大學が置かれてありまし た、又地方各國の國府には國學、所謂地方學校と云ふものを置かれてありました、その大學には明經、經書を明かにするもの、夫れから紀傳、歴史を研究するもの、并に明法、算の四つを置かれた、其外音博士、書博士などもあつて、今の大學に較ぶれば、夫れは成る程太だ小さいものであるが、先づ兎に角分科的の機關を備へて

居つたのでありまして、併し乍ら地方の學校、即ち國學と云ふ方は、之れは全く名許りで、その實は極めて微々たるものでありましたらう、否、中央の大學にしましても重もに勉むる所は文章或は詩を作ると云ふやうな事で、學者共の遊戯的の閑事業に備へられたのでありまして、今日は吾々教育社會に於てはソンな呑氣な譯にはいかぬ、時勢の進歩上益々要求する所は大となり、責任は益々重くなるのでありまして、隨つて王朝の大學の時の教授、博士と云ふものに較べて見れば、今日は無論大体には好くなつて居つて、唯だ文章の法則とか經書の講義とか、詩を作るとか云ふ事では濟まない、夫れは勿論さうなければならぬのでありますが、尚ほ王朝の時代の博士とか、教授とか云ふものを見るに、前申した如く社會の要求が多きを求めない爲に、その學力に於ても之れと云ふ別段の研究をしたとは思はれない、却て夫等の人よりも諸宗の僧侶の人の中に博識家があつて、隨つて中央の學問は僧侶が已れの任として居つた樣である、素より僧侶の事であるから、佛學を研究するのは當然であるが、佛學以外の學問、儒教とか、神道とか云ふものも亦多くは皆僧侶がして居つた、即ち經書の註釋なども僧侶が着手をした事が多いと云つて宜いのである、又地方の國學に對しては各國に國分寺と云ふものが置かれてあつて、之れに依て經書の講説を聽くことも出來、或は之れに依つて國法の一般を國民に知らしむる事も出來た、國分寺、國師の勢力は宗教は勿論政治、風化の上にも力を得て居た事は往々歴史の上で見ることが出來る、さう云ふ譯であるから大學は有つても大に振はず、寧ろ學問の中心、淵叢と云ふものは、その頃で

申せば比叡山とか或は山門とか又は法隆寺とか或は高野山とか云ふ樣に各宗の重もなる寺であり、夫れに引續いては地方々々の重立たる寺が又學問の中心となつた、所で夫等の寺では何を研究したかと云ふに、決して佛學許りでは無い、御承知の通り佛學の事は內典と云つて居るが、內典に對して外典……外典は佛教以外の學問の事で、餘の學問も矢張この叡山なり、山門なり、南都なり、其他の寺々で研究をしたのであり升、御承知の通り、印度には昔から五明と云ふのがある、五つの明と書くのである、今で申せば五つの學科、五學科と云つて宜しい、五明は何であるかと云ふと第一番に聲と明の字とを書いて聲明、第二番が醫法明、第三番が因明である、四番が工巧明、五番が內明である、この內明が佛學の知識であらう、之れは除けて置きますが、その聲明は何

であるか、只今で申せば即ち文法并に音樂である、音樂は矢張佛教が中心になつて居た、之れは私が申さぬでも諸君が御承知の事である、無論其頃には朝廷には雅樂寮と云ふのがあつて、開闢以來の日本樂即ち神樂、催馬樂と云ふやうなものが行はれて居つたです、その雅樂寮のあるにも拘はらず、夫れに對峙して又佛教の方で聲明道に依つて音樂を興し、只管己れの經文を面白く愉快に聞かせんとしたのである、故に今でも何だか經文を讀むのを靜かに心氣を澄して聽いて見ると深く心根に徹する、此御經讀誦の音聲ほど人の心を感ぜしむるものは無いのである、尤も其御經讀誦の際の鈴の音も宜しいが、夫れよりも尙ほ優しいは讀誦の節である、夫れは何故かと云ふと、奈良朝の頃に道榮と云ふ歸化僧があつて、此人が此讀誦の節を傳へたのぢや、夫れか

ら後に道命と云ふ人があつて其人の聲が實に麗はしい、雅麗と云はうか何と云はうか實に何とも云へぬ美しい、鈴の鳴るが如く、又玉の鳴るとでも云ひませうか實にどうも奇麗なる聲であつた、其道命と云ふ人の出た爲に經を讀み、讀誦する聲が定まつたのである、夫れは唯讀經の上許りでは無い、延いて一般の人の或は歌を讀むとか、或は朗詠をするとか云ふ事にも、矢張夫れが一つの源となつた、その証據は『和漢朗詠集』の著者藤原公任公も此讀誦の事を勉強せられたと云つて居る、さすればこの『和漢朗詠』は實はこの讀經の節から來たのである、又今日京都などで流行りまする所のいろ〳〵の歌……謠曲、能樂と云ふやうなものは勿論淨瑠璃、義太夫などに至る迄も、決して朝廷の雅樂寮の音樂に淵源をしたのでは無くして、却て佛教が傳へた所の音樂に淵源をしたのではあるまいかと思ふ、啻に經を讀む許りでは無く、梵唄と云つて佛教の爲に歌を唱へるのがある、夫れに用ひられ、モウ少し進んで各宗で和讃を讀む、之れも梵唄の轉化である、梵唄と云ふのは圓仁から傳へられ次ぎに良忍と云ふものがあつて其人がまた聲が好いものだから、所謂六律六呂を備へてチヤンと梵唄が成立をした、夫れが今大原に殘つて魚山の聲明流が開かれた、日本で音樂らしい音律は……完全に出來て居るのは固より其他にもありませうが、先づ大原一流の聲明であると云ふことは明かなことで、餘程之れは注意をしなければならぬことであると思ふ。次に醫明はドウであるか、我國に於ては太古大己貴命、少彦名命の事あり、又降つては朝廷に典藥寮があつて、醫博士、針博士、博士の二博士が早く置かれて、充分とは云へまいが、先づ

先づやつて居つたのであるが、其外に又佛教の方に於ても醫術の方は非常に進んで居つたのであります、醫術の方は和氣氏と丹波氏とかが之れを傳へた外に、各宗名僧があつてさうして醫者をやつて醫學の進歩を助けて居たと云ふことは疑ひの無い事である、夫れは又どう云ふ譯であるかと云ふと、この醫者の方の事は外の佛教とは違ひまして、贈病と云ひ病を贍る、目邊に詹を書いてセン、その嗜病と云ふが今で申せば診察に當る、夫れから看病と云ふやうなことをする僧も亦已に奈良朝の時代に在つた事が見えて居る、即ち元正天皇の頃に已に看病僧と云ふものがあつたと云ふことが歴史に殘つて居る、夫れから後を調べて見ると亦經文の中で『金光明最勝王經』の中に除病品と云ふのがある、夫れを見ると今日の內科學とも云ふべきものが載つて居つて、如何に僧徒が醫術に腕を奮はれたかゞ分る、我國舊醫術の淵源はこの佛法の醫術が亦與つて力あることが分る。夫れから工巧明は之れは重もに曆であらう、次に卜筮もその中で、之れは朝廷には曆博士があるが、僧徒の方にも『宿曜經』と云ふ風な經文があつて、夫れから出て宿曜道と云ふものがある、夫れで星學、卜筮の如き皆夫れに備つて居る、宿曜道は今日の曆學より進んで居ることは云はぬが、それは時代相應で、其時代では夫等のものは立派なものであつたのである、之れに由りて我國の文明が進んで來た事は之れは爭はれぬ事と思ふ。諸君、其頃は又京都にはいろ〳〵の私立學校がありまして、和氣氏の弘文院と藤原氏の勸學院、源氏の淳和、奬學兩院、橘氏の學館院と云ふのがあつた、斯く諸家に幾つもの私立學校があつたが、其內一時勸學院が一

番盛んであつた所から、勸學院の雀蒙求を囀ると云ふやうな諺が殘つて居る、(大笑)そうして諸名族が斯く幾つもの私立學校を建てゝ和氣氏なり、藤原氏なり、其他も各々我が經費で建てた學校へ自分の子弟を遣つて教養したが、他家の建てた學校へは遣らない、隨つて他家の子弟を收容しない、況んや普通一般の人の子弟をやである、而かも其處で教ゆる所のものは貴族的文學で、詩や、文や、歌や……夫れも深く研究をしなかつた、極く表面の浮華に流るゝやうな事許りであつた、夫れ故王朝の末は如何に浮華に流れて居つたかは容易く証據立てることが出來る、斯くの如く當時の私立學校と云ふ者は貴族的であつて、一般の弟子の教育、殊に普通學を教ふる所の學校は無かつたのであります、其普通教育を教ふる所の普通學校を初めて建てたのは誰である

かと云ふと、先づ支那にも矢張大學、國學と云ふ制度があるが、多くは閭塾と云ふものがあつてやつた、今日で申せば小學校である、日本では大學、國學はあつたが、私立學校……閭塾はマダ無かつた、即ち普通の小學校は無かつたのを、夫れを始めたのは申す迄も無く眞言宗の開祖と申しませうか、弘法大師である、弘法大師が只今でも夫の東寺のある九條邊へ持つて行つて、初めて綜藝種智院と云ふものを設けられた、之れが抑もの始まりである、此綜藝種智院は佛學の外に普通學を教へたのである、儒學も教ふれば何でも教へる、隨つて僧侶も入つて來れば俗人も入つて來る、貴族ならざるものが入ることの出來たのは先づこの弘法大師の綜藝種智院であつたことは、それは歴史に明瞭に乘つて居る、諸君是等のお話をして見れば、佛教の僧侶が普通教育の元

祖であつて、隨つて如何に我國では教育と佛教との關係が深いかと云ふことは充分に分らうと思ひます。

王朝は夫れで措いて更に下つて申しませうならば、武家の鎌倉時代はドウであるか、南北朝の戰國時代に於てはドウであるか、夫れ等の時に於ては尙更僧侶の一人舞臺である、昔は留學生と云ふのがある、多くは支那へ留學する、夫れも大々的成功をしたのは多くは僧侶である、夫の玄昉を首めとして或は空海、或は叡山の最澄等各宗夫々留學生を出して、獨り佛教の上に貢献するを得た許りで無い、一般の學問の心髓となり又後世へ傳へた所のものは莫大で、殊に王朝の時代は偖て置き、鎌倉時代、南北朝時代或は戰國時代に於て海外と交通したものは全く僧侶だけであつたのであります、即ち文教の悉く地に墮ちたる中に屹立して屈せず撓まず泰然として能く文脈を維持したのは鎌倉と京都とに在る五山などの僧侶であつたと云ふことは疑ひは無からうと思ひます或人の云つた言に、京都に文科大學がマダ出來ぬ、漸〳〵今年中には出來る樣であるが、併し昔は、京都には文科大學が幾つもあつた、夫れは叡山首め各宗の本山である、彼等は佛教の蘊奥を研究すると同時に、一面には學問の中心であつた、今日は反つて昔に劣ると云ふ事を言はれたが、之れは決して不當の言ではあるまいと信ずるのであり升、諸君、之れは强ち高尙の事許りを指すのでは無い、モウ少し卑近の學問にしてもさうである、牛若丸は何處で學問をしたか、鞍馬山へ行つて學問を研究した、辨慶は何處へ行つて學問をしたか(笑聲起る)申す迄も無く書寫山に行つて學問をした、又日蓮宗の開祖日蓮上人はマダ薙

髪せられぬ前は確か藥王丸とか申されたさうであるが、之れは彼の小湊の清澄寺にあつて學問をせられた、斯くの如き例を擧げれば數限りは無い、各地各宗の寺院法堂に於ても粗ぼ同樣の事であらう、さうして見れば書寫山あり、鞍馬山があり、乃至清澄寺があつて、辨慶が出て、牛若丸が出て、日蓮が出て、名を千古に傳へた、夫れ丈でも以て教育は寺でしたと云ふ事が分る、尙ほ之れから推して一般の者も寺で學問したと云ふ其証據は後になつてマダ小學校と名が變らぬ内には、一般に學問をする所を寺小屋と云つたので分る、私共が子供の時に學校へ行つて先づ教はつたものは何かと云ふと、いろは四十七字である、之れは誰が作つたかと云ふと弘法大師だと云ふ、果してさうであるかどうか知らぬが、いろは四十七文字には佛教の極意が簡短に傳へてある、即ち諸行無常云々の四句の偈の意味が表されて居りまする と云ふことは、誰も辨駁は出來ぬ事である、之れは教育と宗教と親密の關係を持つて居つたと云ふ好い証據である、御承知の通り、經書を講ずるには古は古註に依つて講じた、所が新註をしたのは朱子で、其朱子の註を我國に傳へて來たのは儒家ではございません、儒家には清原、菅原などがあつた、併し乍ら朱子の新註を傳へたのは有名なる玄慧法印である、又所謂儒者の起りは矢張僧侶から出たと云ふことは異論を挾む事は出來ぬ、その証據は德川氏の初めには、僧侶は素より頭を剃つて居つたが(笑)儒者も亦頭を剃つて居つた、有名なる惺窩先生、羅山先生の如き皆初めは頭を剃つて居られた、啻に儒者が頭を剃つて居た許りで無く、醫者も矢張頭を剃つて居つたのであります、(笑)醫者が頭を剃

つて居た許りで無く、畫家なども亦その方の學位とも云ふべきものを貰うと、法印であるとか、法眼であるとか、僧侶の樣な名前を貰つて喜んで居つた、固より朝廷にはさう云ふものが成立をしては居らなかつたが、實際教育上に重もに力を盡したのは即ち僧徒である、各宗の僧侶であると云ふことは之れは教育眼より認むる事が出來るのである。

諸君、さうすると日本の僧侶は昔は大變に勉强をしたやうに見えるが、之れは日本許りでは無いのである、西洋でも昔は丸切り夫れと同じであつたのでありまず、西洋と申しても希臘、羅馬の昔の事から延いてお話をすると長くなりますから、今の西洋になつてからのお話をするが、今の西洋になつて、初めて學校と云ふものが出來ましたのは、英語で申すとカテヒチカルスクール

即ち問答學校とも譯しませう、それが西暦三世紀前後に出來て、夫れからソンなのが諸方に出來たのでありますが、之れは全く基督教の教義を普通の人に教へる爲に問答的に書物を拵へて、夫れに依つて學問を教へたから問答學校と云ふのである、夫れから五世紀から六世紀に掛けて希臘及び西羅馬の方に耶蘇教の僧院があり又僧坊があり之れに附屬をした學寮がある、所謂僧院學校、僧庵學校とも云ふべきものが出來た、又彼方此方に矢張本山がある、獨逸語でドーム、英語ではカシドラル之れには皆學校が附いて居つて、本山學校と云ふのである、本山の無いやうな所には小さな夫れと同樣なものがある、夫れに學校では皆內學、外學と云つて二の分科になつて居る、內學、外學は先程申した內典、外典に當るやうなもので、中で普通、內學、と云ふのは所謂宗

教を教へて居る、外學は讀書、算術より始まつて七つの學科がある、夫れを七科と云つて八釜しいもので、その七科を研究をさしたのである、諸君、七科とは何であるか、一々講釋をすると長くなりますが、大体を申すと哲學、音樂夫れに修辭、文法と云ふものが一つ又算術、幾何、天文と云ふやうなものを混ぜれば丁度七つになる、夫れで先程申した五明が矢張之れに當るので、印度の方では五明、西洋では七術或は七科と云ふ、その五明を叡山首め諸本山で研究をした樣に、西洋の本山學校でも矢張七科を研究したのであります、如何に能く似て居るではありませんか、然らば小學校は又ドウして起つたかと云ふに、早くも羅馬法王が耶蘇教の事を教へるに學校と云ふものゝ必要を感じて各寺區の附屬として造つたことがあります、延いて近世に及んで十六世紀の頃よりルーテルが新教を唱へた後はその趣意を一層廣めて更に聖教問答を鄭寧に教へる事になつた、けれどもドウも資本及び教師が無くては遣る事が出來ないので、種々奔走をして資本を募り擴張もしたが、最初は冬季のみにして居つたのが、漸々に同宗許りでは無い他の宗派も遣るやうになつて、終に冬許りではない、夏も、秋も、春もするやうになつて、其結果各村に小學校があると云ふやうな有樣になりました、即ち今日歐羅巴の小學校は、實に日本の寺小屋が多く宗教に淵源したるが如く、西洋の小學校も亦宗教學校に淵源をしたのであります、また舊教の方では所謂ゼスイスト派即ち足利時代にバテレンと云つて我國へ來り一時盛んに歸依者を出した宗教、之れが又非常に力を盡した、ましたゼスイスト派は自然的教育に依つたでは無いが、兎に角

教育に力めたのは事實である、而して同派が政治上にも盡した事は之れは自ら別問題だから略して置きますが、要するに西洋でも日本でも皆昔は僧侶……宗教が大に教育に關係して居つたと云ふことは疑ひの無い事であらうと思ひます。

以上は歴史の話をしたのですが、さあ夫れぢやア何ぜ今日になつて又宗教家と教育家と云ふものが二つに分れるやうになつたのであるかと云ふ事を一つ取調べて見なければならぬ、之れは一言にして申せば、進化の理に依つて斯くあるべき筈である、進化の理は成るべく物事分業をしなければならぬ、何でも皆混同をして一所になつて居つたものが漸々に分れる、分業は即ち進化である、今は醫者にも内科と外科があるが、昔は皆一つであつた、今日は其上に耳鼻咽喉科とか何とか幾つにも分れて居る

が、昔は皆一人で遣つて居た、進化と云ふことは分業をするのである、然らば其時分本山が五明を悉く兼ね總ての教育をなして居たが、夫れが今日では佛教家の手を離れて教育家の手に歸したと云ふも、それは進化の理で當然の事であると云はう、併しそれ許りで無く殊に近世……就中十九世紀になつて宗教と教育とを嚴重に別にする樣になつたと云ふ事は、之れは全く教育家が悪いのでも無ければ宗教家が悪いのでも無い、全く之れは政治上の利害からであると云ふことを認める、十九世紀になつてから歐羅巴の各國は先づ國民を團結して國粹保存とか國家を拵へるとか云ふ事になつて來たのである、語を換へて云へば、國家の統一と云ふことが十九世紀になつて盛んに起つて來た、國家を統一するに就いては國家以外の有力者を排斥すると云ふこ

ことは當然の事である、國家以外の有力者は何であるかと云ふと、彼の羅馬法王の如きである、法王と云へは日本の門跡の如きものゝやうに思ふか知らぬが、なか〳〵ソンなごころのものでは無い、各州各國の帝王よりも誰れよりも一段高い所のものである、言ひ換れば全世界を一人で統御する所の教王であつたのであるが、さう云ふ全世界の教王があつて見ると、折角國家が奮發をして統一しやうとしても、何やら妨害が入つて統一に困難をするものであるから、此者の勢力を殺がねばならぬと云ふ傾きになつた、現に今日でも獨逸の如きは羅馬舊教と云ふものが非常に勢力があるので、卽ち現皇帝などは政治上この羅馬舊教徒を駕御し慰撫する事に力を盡して居る事である、將た又固より諸君は新聞雜誌等で御承知でもございませうが、佛蘭西では先年ワルデツク、ルッソーが內閣を組織して以來、殊にこの舊教徒が佛蘭西の教育に關係する事を拒んで追ひ立てる手段を執つて居る、それは何故であるかと云ふと、之れは何にもカドリツク流の教育が惡いのでは無い、佛蘭西政府の意志の通り如何に完全の教育が出來ても、之れに教育上の有力なる勢力たることを許して、國家の事業の一部分を分担させたならば、他日益々彼等の勢力を張る基礎を造るやうなもので愈々統御し難くなる、之れ決して國家の爲に喜ぶべき事では無いと云ふ政治上の意味からして、益々宗教と教育とは引離す傾きになつたのである、斯く云へば諸君、舊教は夫れで宜しい、然らば新教はドウかと云ふに、之れも矢張略して云へば全く宗教と政治との關係と申して宜からうと云ふのは、國民の統一……國家を統一して國民に普通

教育を施す事になつて見れば、ドウも新教であるから宜からう、舊教であるから惡いと云ふことは無い、又其新教の中にも幾らか派があるのであるから、又其者を一所に入れながら、一宗を抑へて一派を揚げると云ふ事は出來ぬ、夫れで國民教育卽ち普通教育を一般に施すに當つては一宗一派に據るべきで無いと云ふ事からして、是亦相遠ざかつたのは當然の結果である、獨逸と云はず、佛蘭西と云はず、又日本とは云ひません、諸君、國家が政治上の統一よりして勢、宗教を教育の外に除けたのは宜しいが、併し諸君、宗教を教育の外に除けたと云つて決して宗教は教育の上に根絶をしたのでは無い、滅絶をしたのではありません、夫れは英吉利に於て見ても、獨逸に於て見ても、亞米利加に於て見ても各學校、殊に小學校に於ては矢張宗教々育が根底になつて居る、その追出したのは一宗一派の教義を學校で教へることを追出したのであつて、耶蘇教を根底より追出したのでは無いのであります、現に先月英吉利の文部大臣の訓令に依つて見ても分る、小學校には矢張耶蘇教の事を教へることにすると云ふことは、二三週間前の新聞に出て居つたから諸君も定めて御承知の事であらう、佛蘭西は率先して宗教を學校々育以外に除けた國であるが、併し政府が定めた學校令で以て宗教の一宗一派の教義は學校で教へることは出來ぬが、一週間の中に或る一日だけは……木曜日か何かと思ひます、午後と云ふものは必ず小學校を休業にせなければならぬ事になつて居る、さうして其日は父母は必ず子供を連れて各々己れが信仰する宗派の寺院又は教會に參詣をして宗教々育を受ける樣にせよと云ふ注意が佛蘭

西では出來て居るのである、況んや獨逸の如きは學校で矢張聖書を教授して居る、さうして見れば除けたと云ふのは一宗一派を除けたのである或意味からは舊教を除けたのであるが、耶蘇教と云ふ廣いものを除けたのではありますまい。

然るに日本はドウでありまするか、何も之れは誰の罪であると云ふことを詮議をするのでは無いが、明治維新は一面には王政復古と云ふことを申した、夫れで玉松操などと云ふ極端の人は神武の古に復るのであると云ひ、又神武天皇の時には佛教は無かつた、寺もなかつたと云ふので、さア事だ、排佛毀釋となり、佛さんを廢して堂塔を打ち毀すと云ふやうな前代未聞の事に立ち至つて、佛教と云ふものは非常に打擊を受けたのである、其時に方りて夫れは理由のないものだとして、當路の人の間に奔走して

大いに之れが維持に力められたのは、先般死なれた村田寂順師を首め各宗高僧の方々である、物議囂々この間隙に乘じて耶蘇教が入つて來て勢力を廣めやうとした、或は布教と共に學校を設け教育を施した、例へば同志社の如き其頃新島さんが新たに設けられて盛んに宗教的教育を施し、一面には亦布教の方も非常に活氣を帶びて來た、隨つて西洋思想が漸々日本へ入つて來たが、併し又妙な事にはいつとなくその反對に國粹保存と云ふやうな事が唱へられて來て、さうしてドウも此耶蘇教は教育勅語の趣意に反對するとか何とか妙な事になつて、遂にこの舊來の佛教は教育上に排斥され、續いて耶蘇教も亦一所に除けられて了つたが、併し我が明治時代に於て斯く教育界から宗教を除けて了つたと云ふ事は、即ち大西君の完備の教育とは云へぬと

云ふ事を嘆ぜられたる所以である、今日より飜つて見れば、耶蘇教の教義は格別教育勅語と衝突したる所は無い、佛教でも耶蘇教でも何にも教育勅語と直接に反對する處は無い、神學上の議論は別だが、大体から云へば別に衝突した所は無い、サアさうなつて來ると、之れから後は一層時勢が變つて一旦排斥した宗教に却て其力を借らなければならぬやうになる、寧ろ正々と宗教を教育に入れ、佛教と云はず、耶蘇教と云はず、互に手を出して相提携して行つたなら非常に工合が好い事と考へますから、固より一宗一派を教育に入れよと云ふのではありませんが、健全なる純粋なる宗教を採つて以て教育の資とすると云ふことは望む所である、從つて教育家には宗教家がなつて欲いのである、彼の英吉利の如き立派な學校の校長中には宗教に關係ある人が大部分を占めて居る、又佛蘭西の如き公立學校よりは寧ろ私立が却て立派であつて、立派な私立學校は多く宗教家の手で成立つてあると云ふ事は之れは過言ではありますまい、さればドウか今、後は宗教家、即ち教育家たる決心を以て教育上の事に力を盡し、啻に從來の如く宗教家は經を讀んで死人の始末を附ける丈と云ふ許りで無くして、モウ少し生きた人に對して活動すると云ふ事にしたらドウかと云ふことを私は申すのであります（拍手）併し教育と云ふ事は唯だ口だけでは何も出來ないのであります、矢張人を感化するのである、人を感化するには夫れ丈の人格がなければなりますまい、人格と云ふ事は何から出るかと云ふと、矢張信仰が根底になければ六ケしいのであるから、宗教家も矢張信仰を持つて居り人格を持つて居らなければ到底世

の人を感化するに適當の人とは云へますまい、諸君何も一宗一派を兎や角云ふのではありません、孰れの宗教なりとも健全なるものならば宜しい、信仰を茲に置き、さうしてその信仰に依つて氣品を作り、人格を高め、之れを根本として尙ほ之れに加ふるに學問、世才を以てしたならば、人を感化し教育し能く宗教家の本分を盡すことが出來やうと思ひます、故に私は信仰ある眞の宗教家をして教育家たらしめん事を望むのであります、尙ほ進んで小學校は申すに及ばず中學、大學の如きも、幾らかの程度は違ひますが、多少宗教的思想を注ぎ込んで宗教々育を遣ると云ふ樣な覺悟を諸君はせらるゝ必要は無いか、私は考へる、矢張或る宗教々育は、一宗一派では困りますが、或る宗教々育は是れから後の人は寧ろ受けなければならぬのであると云ふことを私は夙に考へたのである、諸君、斯く申すと然らば貴公の云ふ宗旨とは如何なるものであるか聽かうと云ふ、宗教とは如何なるものであるか、之れから更に論歩を進めます。（拍手）

諸君、寔に其宗教とは如何なるものであるかと云ふことを解釋するのは六カしいです、尤も前申す通り一宗一派でないから管長方を首め各宗高僧其他宗教家の中さるゝ所のものとは稍々異なるでありませう、諸君の中には此宗教の解釋に就いては私が申すよりも立派な解釋を御存知な方があるかも知りませぬが、併し夫れは事に依ると各其宗派々々の解釋であつて（笑聲起る）宗教一般に通ずる事を云ふのではなからうと想ひ升、各宗各派我田引水的の解釋を試みはせられまいかと思ひます、私の云ふのは各宗各派では無い、宗教と云ふのはドンなものであるか、

それを私は説くのちや、夫れは實に面倒い、英語でならレリジオリンスと云ふ複數では固より幾つもありますが、レリジオリンスの代りにレリジオンと云ふ一宗一派に拘はらぬ總括したものを説かんとするので、之れを説くは固より至難である、私の所謂レリジオンは何であるか、宗教は何であるかと云ふに、レリジオンと云ふのを宗教と譯したのさへ可笑しいで、何々宗と云ふ宗は一宗一派の宗で夫れ等がレリジオンスなら宗教で宜しいが、レリジオンとは一宗一派では無い、固より人と云へは人全体を指すのちや、一人のみで人ちや無い、幾千万人でも総括したものが人ちや、其人と云ふものはドンなものかと云ふと、私は其解釋は容易にすることが出來ぬ、その一部分たる權兵衛八兵衛から易いが、宗教と云ふも亦同じ事で、各宗を纏めた所のものは私は却て説明を好くしないです。乍併先づ一應宗教と云ふものはドンなものであるかと云へば、先づ私の考ふるには、是迄の宗教はドウも多くは哲學と混同して居る風があるやうに思ふ、試に耶蘇教の本など開いて見ると實に夫れと思ふ事が多い、殊に『約翰傳』などには古き希臘の哲學主義が入つて居ることは爭ふ事が出來ぬ、我が佛教もドウも哲學が大部分を占めて居る事は爭はれぬことである、その哲學とは何ぞや、今の詞で云へばコスモロジー即ち宇宙論である、之れが重もなる部分を占めて居ると云つて宜からうと思ふ、宇宙論は何であるか、即ち現實と絶体との關係を論ずるものが宇宙論である、佛教に於ては或は一切法界空と云ひ、有と云ひ、中と云ひ、現在、未來、過去三世をば有と云ひ空と云ふもの、一として宇宙論的哲學ならざるは無い、此宇宙論的哲

學は固より宗教の根底になるには違ひない、併し乍ら單に宇宙論的哲學を充分に詮索をしたならば、夫れは哲學者にはなれるであらうが、宗教家と云ふにはドウござりませうか、吾々の先輩たる文學博士井上圓了君が今から二十年前に『佛教活論』と云ふものを書いて公けにし續いて其實行を圖らんとして設立された學校が卽ち御承知の哲學館である、卽ち同君は矢張佛教は佛教哲學と云ふのが好いのであると見られた傾きが多いのではありますまいか、凡そ世が進むに從つて佛教哲學と云ふものは非常に勃興をして來ませうが、併し乍ら夫れは宗教と云ふ風に直ちに見ることが出來るかどうか、或は華嚴宗などでは……

……私は知つたやうな風をするけれども實は知らないが(失笑)八宗兼學何でも知つたやうな事を云ふものゝ、實は聽き嚙り學問で何も知らぬ、或は間違つた事を云ふか知らぬが……御承知の通り華嚴に於ては四の法界と云ふものを立てられた、其第一の法界は事法界――事の法界、第二は理法界、第三は理と事の相互に碍り無しと云ふ法界卽ち理事無碍、四番は事と事の碍り無しで事々無碍であるそうな、之れは宇宙論的哲學ではありますまいか、又天台宗の方に於ては、承はれば理性常住と云ふ議論があれば、或は之れに對して日蓮宗の方では、同じ法華であり乍ら事體理用と云ふ其他眞言宗と云ひ、臨濟宗と云ひ、一々講釋をすれば澤山ありますが、要するに夫れ等は皆哲學上の議論ではありますまいか、夫れから又夫の所謂一念三千とか、或は一心三觀とか、大變に立派に聞える、固より立派でもありませうが、併し是等は皆哲學上の議論ではありますまいか、例へば今の世ならば唯心哲學と

云ふやうなさう云ふものでは無いのでござりませうか、ドウも是迄の佛教と云ふものは、議論を聞くと全く哲學になつて了つて、却て宗教らしい所は小乘、律、などの所にありはしまいかと思ふ程で厶ります。御承知の通り又この佛教の方では總ての宗旨を通じて三の法印と云ふものを立てゝ居る、三法印とは第一諸法無我、第二諸行無常、第三寂靜涅槃である、この諸法無我と云ひ、諸行無常と云ひ、寂靜涅槃と云ふは皆無論宗教の根底にはなりますけれど、寧ろ之れは哲學上の議論である、宗教と云ふ側から云へば三番目の寂靜涅槃と云ふのみが稍々物になるのではござりますまいか、偖て寂靜涅槃が宗旨であるとしますれば、この佛教を命じて寂靜涅槃の宗教と呼びませうか、哲學者としては夫れで宜しうござりませうが、宗教家としてはドンなものでご

ざりませうか、御承知の通り佛教には大乘小乘と分けて居る、小乘は灰身滅智を云ふのである、ソコで此灰身滅智では我等此世に大希望を有する人として活動しなければならぬ所のものに對しては少しく不適當ではありますまいか、又然らば大乘の方に至つては寂靜涅槃とするがそれではドウなるでせう、それを私は少しく議論をして見やうと思ふ、抑々この大乘の方では御承知の通り一番、經文として備はつて居るのは卽ち『法華經』であると云ふ事で、『法華經』が諸經の一番王であると云ふことは是迄も皆言つて居る、ソコで天台の智者大師が『法華經』に依つて御承知の五時八教と云ふ判釋を立てられたが、併しその五時八教の最後の所へ來てドウなつて居るかと云ふと、天台の方では卽ち六卽と云ふことがあるそうである、それは先づ理卽、佛で一切衆

生、悉有佛性と云ふところから、進んで觀行即と成り、終に最後の第六即の究竟即として惑の破すべきなく智の發すべきなく妙理究り覺智圓滿の位に入るのである、それは如何にも奇麗の境界であるが、さて此圓滿位に入ると云ふはどんな境界でしやう、啻に寂靜と云ふ事に拘泥してはならぬ、否宗教家としてはともあれ、一般俗人として此の宗教に依り活動をして行くと云ふには、この大乘の寂靜涅槃と云ふことは、小智を斷じて機智を弄せず、チヤンと大不動心を得、大菩提心を得て到る所に、適せざるなく、行く所として能くせざるなき活動的人物になる事なりと見なければならぬまい、この圓滿寂靜位に入つて行く所として、適せざるなく、爲す所として能くせむ事なしと云ふならば、それは無論哲學では無い、宗教たる所であらうと思はれる。

所が今日の宗教と云ふものは兎角哲學的に流れて了つて肝腎の宗教はお留守になりはせぬかと私は考へるのである、天台には御承知の通り止觀の四種三昧と云ふことがある、或は常に步行く常行三昧、或は又座禪を組んで默念して思ひに耽ける常座三昧又或時は起つて經を讀み或る時は座して半行半座三昧をする、又日蓮宗で題目を唱へ、或は淨土宗で念佛稱名をすると云ふ風な事になつて來ると、之れは行に非ず、座に非ず、非行非座三昧であると云つて宜からうと思ふ、併し宗教は本來斯くの如き事をするが目的ではあるまいと思ふ、(拍手)宗教の目的は他に在つて存ずるのである、即ち宗教は徒らに皮相的の座行が目的物では無い、さうかと云つて宗教は亦た智でも無い、智を研くと云ふことは夫れは哲學に在るのである、哲學は智が本である、迷ひ

を開くは宜しいけれども宗教の本体は信仰で無ければならぬ、信仰とは何ぞや、鰯の頭も信仰次第と云ふ話があるが、私の茲に所謂信仰とは人間の微妙の働きで在る、信仰と云ふ事は單に智の働きではありません、如何に佛教の註釋をしても、如何に五時八教を心得て居ても、夫れでは信仰では無い、信仰と云ふ事は知る許りでは無く、其外に感情は勿論、意志と云ふことが入らなければならぬ、智、情、意の三者が構成して居る所が信仰である、而して其重もなる成分は何であるかと云ふに卽ち意志、意力である、から夫れを行狀に現はし、行爲に現はすので無くては信仰の効能が無いのである(拍手)、故に宗教家は勿論之れを知ると共に宜しく言行の上に現はされんことを希望するのであります(拍手)。諸君、宗教は何故に此世に存在して居りますか、幾万の寺院及び

僧侶を何故に遊ばして食はして置く必要が在りまするか、想ふに宗教なるものは之れは誰にも人心の奥には必ず有るべき筈のものなんである、諸君の中には佛教でも無い、又耶蘇教でも無い、……神道は別であるが、……何も宗教心の無い人がありませうか、誰でも三更孤燈の下寂寞聲なく、痩犬の獨り寒月に吠ゆる頃靜かに三世を觀じ來つたならば、一種微妙の感想を浮べざるものがありませうか、必ずや何者か心の奥に動くものがありませう、その動く者卽ち宗教心である、苟も人間たる者にこの心の無いものがございませうか、これ私が宗教と云ふものゝ根本は心の中に在ると云ふことを云ふ所以であります、唯だその芽の出方が違うのである、マダ人智の開けぬ時分は雷が鳴る、ヤア之れは雷神樣が亂暴をなさるのである、その雷神樣と云ふはドン

なものであるかと云ふと、鬼の樣に角が生ゑて居て、虎の皮の犢鼻褌して太鼓を叩いて居る、所謂鬼神である、神さんである、又火事があると之れは火の神さんが亂暴されるのである、雨が降ると雨の神さんが亂暴されるので、風が吹くと風の神が荒れるのであると云ふ工合に、何事も驚く事、分らぬ事であると直ぐ神に託け、且つその神の怒りを解かなければならぬと云ふので種々祭りをする、拜む、これが抑も宗教の初めであると云ふことは恐らく爭ふべからざる事でせう、併し追々考へて見ますと雷と云ふものは元來さう畫に書いてあるやうな恐い者では無い、火事とても火の神のするのでは無い、平素用心をすれば避ける事が出來る、又喞筒で以て消す事も出來る、雨が降るのも風の吹くのも敢て神樣のするのでは無い、所謂天地自然の現象であつて、別

に不思議な事では無いと分つて見れば、不思議では無いが、最初分らぬ中は不思議であるから、夫れから種々の驚怖を生み、畏敬も生み、やがて宗教心となつたのである、その不思議の事は今日から見れば毫も不思議では無い、併しながら同じく之れ五臓六腑で目が二つと耳が二つ口と鼻と一つ宛と云ふ其人間の中に古今なか〳〵不思議の人がある樣ぢや、例へて申さば各宗の開山、各宗の高僧と云はれる人々は色々の奇蹟を現はしてござる、弘法大師の如き、日蓮上人の如き、基督の如き、或は盲人の目を開かしたとか、或は跛を立たしたとか、各々奇蹟を現はして居られる、斯くの如く人の出來ない不思議の事を現はして居られるのは、何處か一つ人に變つた豪い所のあるのでありませう、尤も是れも亦段々研究をして見ると、斯く不思議の働きをなし得たの

は豪いには相違ないが、併し人である、彼れも人、我れも人である
と斯う考へて來る、さアさうなると今度は更に其上の者、即ち神
變不思議のものを拵へ出す樣に成る、弘法大師も日蓮上人も基
督もゐらいはゐらい者だか、其上にマダ豪いものがあつて、夫れ
等の人を造り出す樣に考へて來る、夫れが神さんや、佛さんであ
る、即ち人間の方から色々不思議の神さんや、佛さんを造り出す
のである、學問上より云へば人の心の中には慾望と云ふものが、
ある希望と云ふものがある、誰にでもある、その慾望や希望なる
ものを自分の方から向ふへ投げ出して、さうして此胸の中に在
る慾望や希望はドウも圓滿に滿足に充す事は出來ぬが、各々向
ふへ投げ出してさうして一の標準を立てゝ其標準に向つて希
願し依賴する樣になれば夫れが神佛の拜み初めである、そこで

息災延命とか病氣が直る樣にとかで延命地藏さんと云ふのが
出來て來る(笑)又頭などの瘡毒に對しては又夫れを直す地藏さ
んが要る、ソコでくさよけ地藏さんが出來て頭を撫で乍ら拜む、
阿房の拜むには智惠地藏とか、金が欲しければ蛭子大黑とか、夫
々人間の慾を投げ出して神佛を作る、併し向ふが夫れを聽いて
呉れるかドウかは別問題である、兎に角我が心に希望、慾望があ
つてその希望慾望とする所を投げ出してそうして其圓滿なる
境遇を夢み、畫に現はし、形に出したのが所々の寺などにある佛
像など云ふものである、その結果魔利支天もあれば聖天もあり、
不動尊もあり、思ひ〳〵の希望に依り樣々の標準が現はれて來
るので、不完全なる境遇に在りては已むを得ぬ事で、此標準を社
會に活動する上の燈臺とし、指針として、茲に初めて信仰と云ふ

ものが出來るのである、この信仰に依つて勇氣を現はし、各々充分働くことが出來るのであれば、それは實に結構の事である、不完全なる人間としては甚だ必要な事である。

併し前申した通り、神佛と云ふものが元來我が心中より投げ出したものとすれば、人々の境遇及び智力の如何に依つて信仰の主躰即ち當躰と云ふものが變つて來るのは勿論の事である、從つて種々の標準の現はれて來るのは申す迄も無いのである、始め八百萬の神のあつた所へ佛教が來り、更に又基督教が入つて來て、追々と夫れを信仰する樣になるのも或は當然の事であらう、斯く申さば諸君は谷本は宗教を主觀的に觀るに過ぐるのであると評されるかも知りませぬが、云ふ迄もなく、宗教は、初めは客觀的であるに相違ないが、夫れが段々進むと主觀的になるので

で畢竟宗教が統一して行く次第であります、諸君どうしても宗教は統一に傾かなければならぬ、見玉へ、吾々の躰の中には目もある、口もある、鼻もある、耳もある、其他種々樣々のものがある、皆微妙の働きをして居る、併し乍ら之れを統一するものが無ければならぬ、夫れには心と云ふものが中樞になつて、心王となつて之れを統括し、各々其分に働いて行くから、茲に人間と云ふ一つの微妙な働きを爲すものが出來るのである斯う考へると天地間の種々の現象にも亦何か統一するものがなければならぬ樣想はれる、ソコで神道はドウかと云ふと八百萬の神と云つて八百萬の大勢の神樣がある、併しながらその八百萬の神樣は皆別々になつて獨立して居られるかと云ふことさうでは無い、天の御中主神か何かが神樣の主座に居て之れを統御して居られるや

うである、又天照皇大神の如きは固より大小神祇の首であり升、是れは話が横途に入るが、此神道には面白い事がある、神々に二心がある、荒御魂と和御魂とに分つので、例之ば住吉の大神にしてもが、攝津に在るのが和御魂、長門に鎭座ましますのが荒御魂で、斯く住吉神社には荒御魂と和御魂とありますが、之れはまた貴所方にも私にもある、諸君が平和の間は孜々として家業に勵み、四海兄弟と睦み合つて居るのは諸君の和御魂の然らしむる所で、若し一旦露國と事を構ふるや、干戈を執つて獅子奮迅の勢ひで進み首尾克く陸海軍の全捷を占めたのは是れ諸君の荒御魂である、(大笑)さて然らば荒御魂、和御魂は諸君及び我々にのみあるかと云へば、矢張露西亞人にもある、その外の國人にもある、畢竟人間に二種の靈魂ありとして、それから神にも亦二種の御魂

がある事になつたので、はあり升まいか、佛教でも或は釋迦牟尼佛を大恩教主と崇むるとか、若くは淨土宗で彌陀一佛、眞言宗で大日如來を尊ぶやうに、歸する所は澤山の中の中心となるものを現はさうとするのでは厶りますまいか、去れば纏めて見ると、宗教とは矢張我々人間の持つて居るいろ〳〵の思想いろ〳〵の感情いろ〳〵の想像など、それを外へ現はした一の塊まりであると云ふ事が出來る、現に淨土宗に於ても己心彌陀と云ふことがある、之れは甚だ面白い事であると信ずる、又日蓮宗に於ては三秘と云ふものがあると聞いて居るが、夫れは即ち本尊、題目、戒壇の三秘であるが、この三秘と云ふは之れは外に對しての三秘であつて、所謂妙觧の三秘である、然るに之れに對して又別に妙證の三秘とか云ふのがある、それは主觀的で、內証的である、

今日は自然科學の方に於てはエネルギーを以て一切の森羅萬象を統一せしめ、總てのもの生あるもの生なきもの皆悉くエネルギーが發動して出來るので、エネルギーには何にも心がある、ものでは無いが、恰も萬物を統一して働いて居るかのやうに云つて居る、されば宗教はこの客觀に對して主觀的說明を與ふるのでは無からうか(拍手)。

歸する所、吾々心の中には夙に一の宗教心と云ふものが置かれてあるのである、それを程よく發揚して行くのが宗教の働きであらうと思ふ、一寸譬へて云ふと私は斯うだらうと思ふ、宗教と云ふものは丁度幻燈のやうなものであると思ふ、幻燈は御承知の通り向ふに寫像が寫る、併し何も其處に物体があるのぢやない、本統の物は此方にある、一の物像を種々の機械に依つて向ふ

へ現はすまでだが、宗教も亦その如く向ふに神佛があるのでは無い、我が心の中に宗教と云ふものがある、夫れを樣々の形に想像して投げ出して我と我が神佛を作り之れを信仰する、その微妙の働きがやがて宗教で所謂活動寫眞のやうなものである、活動寫眞の妙は我が手許に在る種々の畫を大きく面白く撮影して人を喜ばしめ、又技師自らも樂むに在つて、何故にアヽ好く寫り好く働くかは別問題である、故に宗教にはドウしても感情が入らなければならぬ、其感情を悉く滅して了つて、想像を悉く脫して了つて、唯た理の一つに落ちたならば夫れは立派なものではありませうが、宗教哲學になつて了つて宗教にはならぬのではありますまいか(拍手)。

諸君、宗教には三の德があると云ふことを今度は耶蘇教を引い

てお話する、抑々耶蘇教では宗教に三の德がある、夫れは宗教の力に依つて我々は愛と信と望みの三つを得ることが出來る、否これは獨り耶蘇教のみならず今の宗教には孰れも愛を得る事、信を得る事、望みを得る事の三つは是非共無ければならぬ、併し乍ら是迄の宗教は兎角に愛に偏して居りはしまいか、即ち四海同胞、普天の下率土の濱一切の畜生まで皆愛する、詰り博愛の教へはこの宗教の極意であると云ふことはこれは疑ひません、宜しく博愛すべし、宗教は博愛に依つて立つべきもので、之れは千古不磨の善い事と信じますが、併し將來に向つては、殊に宗教家に注文して置きたいは吾々は宗教家一般に對しては愛を以て益々宗教の生命とされんことを希望致すが、夫れと同時に、力の宗教を行はん事を希望をするのである、博愛の宗教であると

同時に宗教に依りて我々は力と云ふものを得なければならぬ、一の活力を得る事にしなければならぬと云ふ事を申しまする、申す迄も無く吾々がこの世に立つて居る以上は成功と云ふことが必要でございますが、併し成功するには成功する丈けの力を養つて行かなければならぬ、又若し反對に失敗をした所では夫れを盛り返す丈けの勇氣が無ければならぬ、千挫萬折聊かも撓まず益々奮ひ起ると云ふ勢力を養はなければならぬ、一敗地に塗るや直ちに腹を切り、首を縊ると云ふやうな弱い氣では大事業は成せない、この力即ち宗教に依つて養つて行きたいのである、即ち神通力又自在力とも云ふべき活力を得たいのである、この力があつて始めて失敗に沮喪する事もなく益々向ふに進んで行けるのではあるまいか、私はその力を得る宗教の方に是

非導いて行きたいのである、日蓮宗に於ては折伏と云ふことがござりますさうな、それは何か他の宗旨に向つて折伏を加ふると云ふことだが、それよりも自他共に大に勇猛心を奮ひ卑怯卑劣の邪念を折伏したら何うでせう、一体世の中の事は非常に繁雑のものである、從つて何事も我が思ふ樣にはならぬ、失敗も多い、然るに直ちに沮喪して了つては又再び立つ事は出來まい、折伏とは畢竟この勇氣を養ふ必要がある所から出たので、日蓮宗は一般の人にこの勇氣の宗義を敎へんとする者ではござりますまいか、眞宗で「聞其名號、信心歡喜、卽得往生、住不退轉」と云ふことがある、この住不退轉は卽ち又勇猛心の據る所である、要するに、この勇猛心を以て世に立ち、大奮鬪をして大成功を得、大善根を行ひ世に盡す所あるは宗敎に依るべきであつて、慈悲慈愛は

勿論根本こせねばならぬが、それと同時に之れからの世界は奮鬪の世の中であり、競爭の世の中であるから、單に極樂往生許りを目的とすべきでは無く、宜しく宗敎に依つて神通力を得、自在力を得て此世の中に働いて行く事をせねばならぬ。

一体此競爭の世の中に立つて働くには三つの階級のあると云ふことを私は常に云ふのです、夫れは第一が適應で、風俗、習慣等すべての有り來りの儘に世の中に連れて移り行くもの、第二が奮鬪、自分の力で進歩して行かうと云ふもの、第三が攝取、彼れなく我れなく、四海同胞一樣に攝取して行く、卽ち適應奮鬪、攝取の三階級を經めて進んで行かなければならぬ、之れを卽ち宗敎の詞で云つて見ると華嚴宗の事法界が適應、夫れから理法界と云ふのが奮鬪、最後の理事無碍、事々無碍が攝取である、卽ちこの適

應、奮鬪、攝取の三段を經べき實力を各々宗教に依つて得て相共に進んで行つたならば成功をすることは疑なからう、又各宗各派此方針に依つて相提携し、別に何も折伏などせずと、布教に盡力をしたならば、やがて一切相互に攝取し融通することが出來るのではありますまいか。

宗教には力が必要であると云ふことに對しては好い例がある、禪宗は今日では或は宗教ではあるまいとか何とか云つて不審を抱く人もある樣だが、私が思ふには禪宗も矢張宗教と云つて差支はない、何となれば則ち大膽力を養ふのはこの宗の特色で、又之れが社會に出て働く上に頗る必要だからである、大膽力、大自在力、小事を念頭に懸けず、事に臨んで驚かぬ、皆之れ成功の要素で、即ち勇氣の土臺となり、智も亦之れに依つて大に發生しやう、將た又儒教は宗旨であるかドウかと云ふ論がある、儒教は怪力乱神を語らずと云つて迷信的の事を退け、道德上の意念を固め、正路に依つて邁進させんとする傾きがある、是れ亦恐らく一の宗旨であらう、即ちその修養はやがて道德を行ふ力になるではありますまいか、勿論宗教本來の面目より云へば、必ずしも道德の助けの爲に宗教を勸むるのでは無いが、而かも何はともあれ單に道德の力のみに依つて行かうとするは夫れは足りない、矢張宗教の力を要すべきである、一面には勿論道德倫理の効能もあるが、一面には吾々固有の宗教心を開發々展して、さうして其信仰に依つて一面には大なる愛を得、一面には大なる活力を得て、所謂愛力具備したる活ける人間を造りたいのであります。」

諸君、話が長うなりましたが、教育とは何をするのであるかと云

へば、教育は固より道德をその重もなる目的としますが、夫れ許りでは無い、尙ほ教育は一切の心力を働かしむるものである、一切の心力と云ふ中には宗教心と云ふものもあります、是れ亦教育に由りて充分發達させなければならぬ、宗教心と云ふものは決して迷信ではありません、否、事實上宗教には色々の迷信も混じてあらう、夫れは人智の進歩と科學の發達とに依つて漸く自ら破れる、所で矢張教育は一切の心力を發達して人間其者を圓滿に發達せしむることを目的とすべきである、之れ宗教教育の相提携すべき所以である、それを取纏めて云へば宗教の中に教育が入れば、教育を更に偉大にすることが出來、又宗教の中に教育が入れば宗教は一層精選せられたものになることが出來ると思ふ、故にこの二者は相離るべきものでは無い、相俟ちて充分の慈愛と活力ある國民を養成せられんことを希望致します。

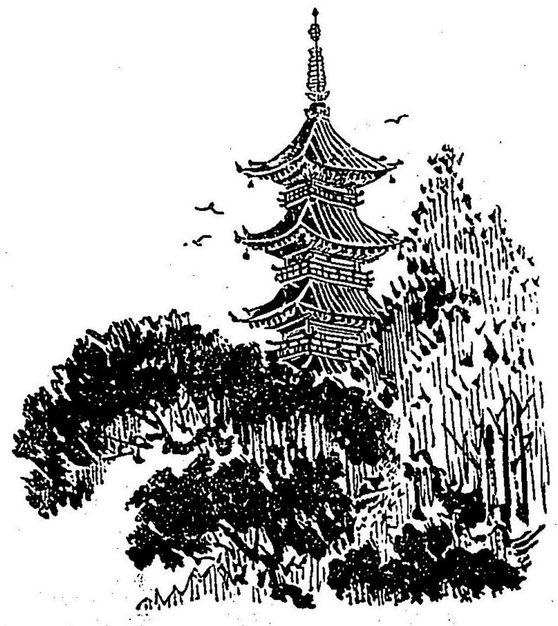
偖て諸君、世の中には宗教は近頃衰へた、今後も亦益々衰ふるであらうと云ふ者もあるが、私は決してさう云ふ事は無い、今後は寧ろ益々振ふべきものであると想ふ、私は決して宗教は衰へたとは思ひません、或は德川時代の武士の衰へた如くに舊風の佛教は衰へるかも知らんが、併し明治立憲時代の新佛教は衰へる所では無い、是れから益々振ふべきものであると想ひます、宗教家諸君、何卒自暴自棄せられざらんことを希望致しまする。併し斯く新佛教勃興の機運に向つたのは一つには耶蘇教の力も多い樣です、耶蘇教が入つて刺戟をして呉れた爲めの効能は確かにあると思ひます、之れは大西君も云つた事であるが、耶蘇教に果して萬金丹的の効能があるか否かは知らぬが、日本に於ては

新生面であり、新活動であるが爲に佛教も其他の宗教も皆之れに抵抗をし、奮發をして改進する樣になつて來た、所謂他山の石でゞも御坐りませうか、されば今後は各派相爭はず寧ろ相提携して我が國運の發達に向つて力を盡されんことを望みます、私は素より宗教家では無いが、この國家の前途に就いては何卒諸君と共に力を盡したい考へでゐります。

右にて大概各宗各派に渡り一通り申上げたやうでありますが、茲に講演を了りますに臨みまして、長い間詰らぬ事を申上たにも拘はらず、御靜聽下されたことを深く謝します、殊に講演半ばに尼公にも御臨場の榮を賜はりましたで、一同敬禮を致さねばならぬかとも思ひましたが、恰も話の要點に取り掛つて居たので、敬禮を致すと夫れが爲に注意が亂るゝのを恐れまして、存じつゝ失禮を致しました、茲に遲ればせ乍ら諸君の分と併せて御挨拶申します(拍手)。

右は明治三十九年二月廿五日京都市議事堂に於て講演したる所を大阪關西速記用達社員の筆記したるなり、今茲に之れを讀過するに改竄を欲する者鮮きにあらざれども多忙の際僅に魯魚の誤のみを正して剞劂に附すと云爾

谷本梨庵識



明治三十九年九月十二日印刷
明治三十九年九月十六日發行

著作者　谷本富

宗教と教育
定價金參拾五錢

發行者　合資會社六盟館
東京市日本橋區鐵砲町三番地

右代表者　杉本七百丸

印刷者　松本義弘
東京市京橋區弓町十三番地

大販賣所
東京市京橋區南傳馬町二丁目　黑甚七
全　市日本橋區鐵砲町　榊原友吉
全　市日本橋區本石町二丁目　杉本七百丸
長野縣長野市櫻枝町　西澤喜太郎
新潟縣長岡町表四ノ町目　黑十郎

發行所
東京市日本橋區鐵砲町三番地
合資會社六盟館
電話浪花二七六四番

印刷所　東京市京橋區弓町十三番地　續文舍

著作權所有

六盟館發行實業科用新刊圖書

農科大學教授 法學博士 和田垣謙三先生閲
法學士 林 清先生著
●農業經濟教科書
洋裝 全壹冊 定價金七拾錢

農科大學教授 法學博士 和田垣謙三先生閲
法學士 若林 清先生著
●農業法規教科書
洋裝 全壹冊 定價金四拾錢

農學士 中尾師藏先生著
●最近實用肥料學
全壹冊 上製 定價七十五錢 並製 定價五十五錢

系島農學校長 山下與之助先生 共著
同校教諭 平川正幹先生
●實驗蔬菜栽培新書
全壹冊 上製 定價七拾錢 並製 定價五拾錢

長崎師範學校長 後藤嘉之先生著
●動物界新教科書
洋裝 全壹冊 定價金四拾錢

長崎師範學校長 後藤嘉之先生著
●植物界新教科書
洋裝 全壹冊 定價金四拾錢

長崎師範學校長 後藤嘉之先生著
●生理衛生新教科書
洋裝 全壹冊 定價金參拾五錢

三重師範學校長 根岸福彌先生 共著
東京師範教諭 佐藤禮介先生
●理科教科書
定價合本金八拾錢

農學士 明峰正夫先生著
●農業總論
洋裝 全壹冊 定價金參拾五錢

農學士 明峰正夫先生著
●最新農具論
洋裝 全壹冊 定價金五拾五錢

福島縣立蠶業學校々長 農學士 十時雄次郎先生著
●養蠶學教科書
洋裝 全壹冊 近刊

農學士 十時雄次郎先生著
●新編土壤學
洋裝 全壹冊 定價金四拾錢

農學士 大脇正淳先生著
●普通作物教科書
洋裝 全壹冊 定價金六拾五錢

農學士 大脇正淳先生著
●特用作物教科書
洋裝 全壹冊 定價金六拾五錢

理學博士 愛知農林學校教諭 松村松年先生閲 藤井欽吾先生著
●實驗用昆蟲學教科書
洋裝 全壹冊 定價金五拾錢

農學士 大脇正淳先生著
●果樹栽培教科書
洋裝 全壹冊 定價金六拾錢

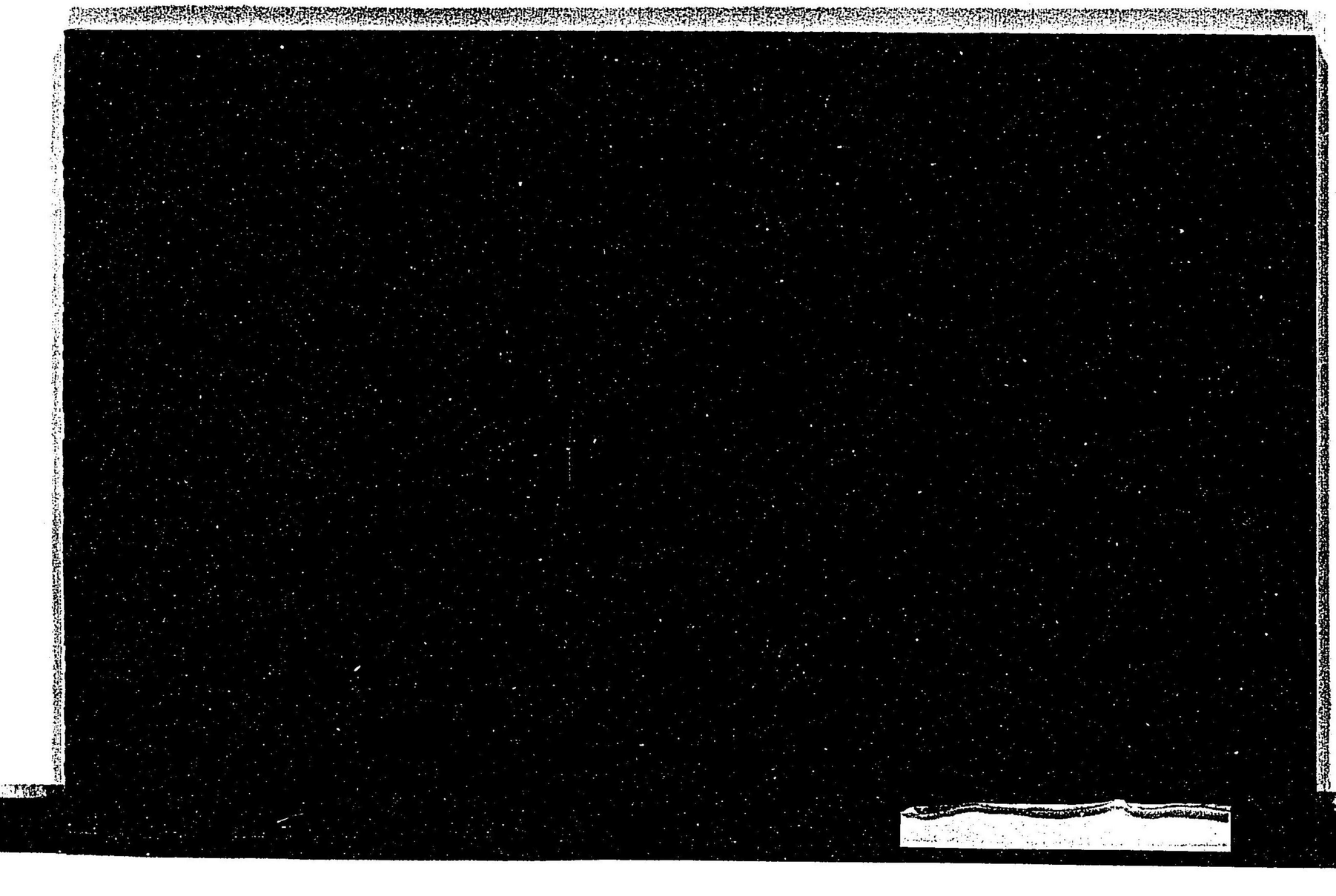
農學士 先生著
●蔬菜栽培教科書
洋裝 全壹冊 近刊

農學士 草場榮喜先生著
●蔬菜園藝學
洋裝 全壹冊 定價壹圓五拾錢

實業家の良師友
●實業學表解叢書
洋裝ポケット入一 定價壹冊金拾八錢 郵稅金貳錢

●農業通論 ●商業通論 ●肥料學 既刊

以下近刊
●土壤學 ●作物と園藝 ●牧畜と家禽 ●蠶桑と昆蟲 ●農產と栽培 ●實業算術 ●實業簿記 ●實業地理 ●其他逐次發行



259
154

013637−000−4

259−154

宗教と教育との関係

谷本　富／著

M39
ABA−0106